スピリット・マイグレーション 4

Spirit Migration

ヘロー天気
Hero Tennki

主な登場人物
Main Characters

1

エッリア領内にある魔導技術研究施設を訪問していた京矢（きょうや）と、マーハティーニのメルエシード王女。そこを反乱軍の武装組織に襲撃された二人は、命からがら脱出に成功した。

スィルアッカ率いるエッリア軍精鋭団の戦車隊に保護されて安堵したメルエシードは、緊張が解けて疲労が押し寄せた為か、車両内の座席で眠りについている。一方、応急手当を受けた京矢は、精鋭団を指揮するスィルアッカの活動に協力していた。施設内の様子をコウから京矢に、京矢からスィルアッカに伝えるという方法で、外から内部の正確な情報を得るのだ。

「えっ、それマジかよ！」

「どうした？」

施設を睨む戦車の上で唐突に驚いた京矢を訝（いぶか）しむ事もなく、スィルアッカは冷静に問い掛ける。京矢がコウから何か驚くような情報を得たのだろうと推察しているのだ。

彼女は既にコウと京矢を介した交信技を使いこなしていた。

反乱兵達の思考を読んだコウによると、彼等は元々施設の警備をしていたエッリアの兵士ではな

く、数日前に施設を襲撃して入れ替わっていたらしい。
正規兵の遺体が埋めてある場所も伝えられ、スィルアッカはそちらに兵を向かわせた。
今回の緊急事態には、公務の会議を中断して側近のターナに後の処理を任せ、大急ぎで救出にやって来た為、いつもターナが控えているはずのところには京矢が居た。
「ふむ……どうにも反乱軍の動きがおかしいな」
特に京矢に意見を求めるでもなく、スィルアッカは反乱軍の行動の不審を呟いた。すると京矢から、彼等が自分の事を知っているようだったと意外な言葉が返ってくる。
「それも妙だな」
京矢に関しては公式発表したとはいえ、宮殿上層の人間の中でもまだまだ謎に満ちた人物というイメージが先行している。これが他国ともなれば『ゴーレムのような巨漢の男』だとか、『小人のような老人』だとか、『日の光を浴びると皮膚が溶けてしまう為、常に闇色のローブを纏っている』などという無茶苦茶な人物像が氾濫している。
一部はワザと偽情報を流して混乱させているのだが、分かり易い身体的特徴があるとはいえ京矢の容姿を正確に知っていたとなると、誰かが反乱軍に情報を漏らしていた可能性も考えられるのだ。
特に今回メルエシードが狙われた事から、マーハティーニ辺りに反乱軍のスパイが潜り込んでいるのではないか、とスィルアッカは推測する。
――ってスィルアッカが言ってるんだけど、兵士達から何か拾えるか？――

『うーん、今は〝こっち来たー〟とか〝早く逃げないとー〟とかの意識が強くて、細かい事までは考えられないみたい』
京矢が交信でコウに問い掛けると、コウは今現在の兵士達の内面を読み取って伝える。
施設の緊急避難路から撤退を始めた反乱軍兵を追い掛け回しているコウは、反乱軍に潜り込めばてっとり早く色々分かるのではないだろうかと考える。
――潜り込むってどうやって……ああ、なるほどその手があったか――
『うん、さっき壁を叩いた時に落ちてきたのがくっついてるから』
反乱軍兵を追い掛けながら施設内を移動中、適当に荒ぶっている振りをして壁を叩いた際、天井に張り付いていた小さな虫がパラパラと降ってきて複合体に付着している。この虫に憑依して、兵士達にくっついて行くというアイデアだ。
「――って事なんだけど、どうかな？」
京矢から提案を聞いたスィルアッカは、確かにコウが潜入すれば常に反乱軍の動きを把握し、居場所を特定する事も出来ると考える。今回の件を含め、反乱軍の行動については裏も押さえておきたい。
「暫くは宮殿でコウが活動する機会も無い事だしな、許可すると伝えてくれ」
スィルアッカから『反乱軍潜入案』の許可を貰ったコウは、複合体を異次元倉庫に片付けて虫に憑依。追跡者（ゴーレム）が突然消え失せた事で『召喚の時間切れか？』と仲間の脱出の為コウの誘導役を務め

ていた反乱軍兵士が足を止める。
その内の一人にくっついた小虫なコウは、カサコソと甲冑の隙間に潜り込んだ。
「よし、兵士の一人に取り付いたみたいだ」
「そうか、ならば追跡の手を緩めてやらねばな」
反乱軍兵への深追いを禁じ、施設内の制圧と生存者の捜索を優先するようスィルアッカが指示を出す。それと入れ替わりにやって来た伝令から、施設の近くに埋められていた警備兵の遺体を発見したという報告が届けられた。
「そうか……よし、これであの反乱兵共は施設の警備兵と入れ替わっていた反乱軍兵士だった事が証明された」
一つ憂いが晴れたような表情を浮かべたスィルアッカに、京矢が怪訝な顔を向ける。コウが傍に居れば彼女が何を思い、考えているのかすぐに把握出来るのだが、あいにくと今は不在だ。
そんな京矢の疑問を感じ取ったスィルアッカは、少し憂いを帯びた表情を浮かべると、厄介な問題の一つが解消された事に安堵したのだと話す。
「とりあえず、ここで殺された使節団一行が属する国からの抗議や賠償請求を躱せる」
今回の事件は全て反乱軍が行った暴挙であり、エッリアは被害国側の立場であると表明出来るのだ。犠牲者の追悼云々より先に、そんなところでホッとしなくてはならないのも政務者の在り方だとスィルアッカは自嘲する――自分の手は今も血塗れなのだと。

「軽蔑するか？」
あくまで軽い調子ながら内面の緊張を感じさせるその問いに、京矢は『んなこたぁ無い』と答えた。自分も、生き延びる為に同行していた他の研究者達を見殺しにしているし――
「スィルアッカ達の仕事場が、人の命さえ取引に使われるような大変な世界だって事は理解してる」
「……そうか」
京矢の淀み無い理解の言葉に、スィルアッカは少しだけ救われた気分になった。それから暫くして、施設の制圧を完了した精鋭団の伝令から、追撃を逃れた反乱軍部隊が南西方面へ逃走したとの報告が届けられたのだった。
起伏の激しい砂漠地帯では、足場の悪さからどうしても戦車隊の機動力は砂馬に及ばなくなる。エッリア軍精鋭団の追跡を、反乱軍部隊は施設の厩舎から調達した砂馬の足で振り切った。日が沈む頃、砂峰の影でキャンプを張りつつ、今後の事を話し合う。
「我々は現在この位置にいる。本隊はマーハティーニ軍に北側を抑えられている為、陽動の攻撃部隊が廃鉱を通って――」
隊長兵士は、本隊と合流すべく自分達『特務別働隊』の、これからの行動について語る。
既にナッハトーム正規軍の装備は解除され、全員がバッフェムト独立解放軍特務別働隊の基本装

備を纏っている。
『この人は〝対の遠声〟を持ってるのか～、何か他の人とはちょっと違うような？』
彼等の会話などから色々情報を吸い上げて記憶しておけば、京矢を通じてスィルアッカ達に伝えられる。あまり近付き過ぎて羽音ではたき落とされないよう、兵士達の頭上をゆったり漂う小虫のコウは、やがて隊長兵士のローブにぺたりと張り付いた。
――まったく、こんな簡単な任務を失敗するとは『精鋭』が聞いて呆れる……所詮こいつ等の実力なぞこの程度か――
隊長兵士が胸の内で毒付く心の声。その思考から拾い上げられた情報が、現在はエッリアの離宮まで引き上げている京矢へと送られた。

「こりゃまた、随分と重要な情報だな……」
離宮の奥部屋でコウからの情報に意識を傾けていた京矢は、隣の部屋でターナと今回の事件に関する各方面への概要発表について話し合っているスィルアッカに伝えた。
コウが探り出した重要な情報。それは施設を襲った反乱軍兵士の隊長は、反乱軍で同志として活動をしているが、本当の所属は別である事だった。どうやらヴェームルッダ国から派遣された雇われ兵らしいが、反乱軍兵士達もその事は知らないようだ。
「まだあんまり詳しいところまでは探れてないみたいだけど、なんかその隊長兵士は別の誰かに雇われて反乱軍に居る、みたいな？」
「ふむ……色々と複雑な事情が絡んでいそうだな」
スィルアッカにとっては心に負った傷を思い出すのであまり聞き心地のよくない国名だ。しかしその精強な兵力を以てエッリアの後ろ盾を担って来たかつての軍事強国であるヴェームルッダは、誇りや名誉を重んじる国柄であり、国王の方針も変わっていなかった筈。
裏で反乱軍に手を貸しているとはちょっと考えられない。スィルアッカはそう考える。
「グランダールとの一戦で帝国内の安定は図れたと思ったが、そう思い通りにはいかないものだ」
これはもう一波乱、何か大事が起きそうだと、スィルアッカは気を引き締めた。

ナッハトーム帝国内の勢力図はここ数年でかなり変動していた。機械化兵器の開発成功によってエッリアがヴェームルッダからあまり兵を借りなくなった一方、反乱軍征伐などでマーハティーニが多く借りている。
エッリアのガスクラッテ帝はヴェームルッダのこれまでの貢献を称えて関係は大事にしている。だが、年々エッリアに貸与する兵が減り、唯一の強みであった武力で差を付けられた事がヴェームルッダの不安と嫉妬を煽り、疑心を呼び起こしてもいる。
スィルアッカの推測とは裏腹に、ヴェームルッダは暫定的ながらマーハティーニの策謀に手を貸していた。

ヴェームルッダ側としては、エッリアの帝都としての格を保つ為に散々後ろ盾の役割を果たして来たのに、強い兵器を手に入れた途端お払い箱扱いかという意識があった。そこをマーハティーニのレイバドリエード王が巧みに突いた形だ。

「エッリアの施設で反乱だと？」

「ハッ、まだ詳しい情報は不明ですが、メルエシード様の同行する視察団一行が巻き込まれ、壊滅したという話も……」

「な……っ！」

妹姫メルエシードの顔が脳裏を過ぎり、一瞬言葉を失うマーハティーニのディードルバード王子に、伝令から戦況が伝えられた。

反乱軍の攻撃部隊が征代軍の左方向から奇襲を仕掛けて来たという報告。どうにか対応しようとするディード王子だったが、すぐには意識を切り替えられない。

「迎撃の準備を――いや、包囲網を固めて敵本隊の動きに注意しろ！」

「反乱軍本隊より突撃部隊が接近！」

征伐軍の動きが鈍る。その隙を突いて攻勢に出た反乱軍の本隊が、崩れた包囲網を突破した。

「敵攻撃部隊、退いて行きます！」

「反乱軍本隊は散開しながら撤退中」

「ええいっ、またこの戦法か！」

反乱軍の撤退はいつも素早く、まるで壊走しているかのように散り散りになりながら退いて行くのだが、どういう指揮なのかちゃんと統制がとれていて非常に鮮やか。逃げる事にかけては高い錬度を誇っていた。

今回もまた逃げられてしまったと呻くディード王子はしかし、ここまで追い詰めて逃げられた反乱軍の事よりも、エッリアの施設で起きたという反乱の事が気に掛かっていた。追跡隊を組織した後、一旦本国まで引き上げる事を検討する。

「エッリアの反乱について親父殿から何か連絡は入っているか？」

「いえ、特には。本国でもまだエッリアに問い合わせを行っている最中なのではないかと」

部下の答えに『そうか』と呟いたディード王子は、反乱軍が撤退して行った方角を一瞥すると、征伐軍の撤収に取り掛かるのだった。

バッフェムト独立解放軍という組織が生まれたのはおよそ四年前。元々の発端は、ガスクラッテ帝が支分国への食料援助でエッリアの価値を上げる為に、バッフェムトから大型漁船を接収して漁業の縮小などを突きつけた事に対する反発だといわれている。

当時、バッフェムトの港街を中心に周辺の村や集落を治めていた一族の長が、首謀者となって組織を立ち上げたのが始まりだ。

「現在、本隊は南の廃鉱から渓谷を移動中との事だ。我々は平野を迂回して山間部からのルートを

行く」
　本隊が無事、征伐軍の包囲を抜けて集合地点へ移動を始めたとの連絡を受けた『特務別働隊』は、速やかに合流を果たすべくマーハティーニ領内を横断していたのだが、一つ問題が発生していた。
　エッリアの魔導技術研究施設からは本来もっと余裕を持って撤収する予定だった為、施設の物資を確保しておく段取りが崩れて、手持ちの水や食料が心許ない状態になっているのだ。
「補給が必要だな」
「確か、この先の近くに村があった筈です」
　岩山と渓谷ばかりが連なるマーハティーニの領内。エッリアのある東方向に進むほど地形は山間から荒野へと変わり、やがて砂漠が広がり始める。特務別働隊は砂漠と荒野が交わる、山間の寂れた村へ補給に立ち寄った。
「我々はバッフェムト独立解放軍の部隊である！　活動物資が不足している為、この村に立ち寄った次第だ！」
　村の代表者を求める隊長の声に、何人か村人が姿を現す。いずれも老人ばかりで、若者の姿は見当たらない。隊長が村の代表者達と話している間、隊の兵士達は見張りの兵士を残して三人一組で村の中を練り歩く。
「年寄りばかりだな、ここは」
「へえ、若い衆はみーんな都の鉱山まで出稼ぎに出ておりますじゃ」

　隊長のローブにくっついていたコウは、兵士と村人、双方の思考からそれぞれの思惑を読み取った。
　村人達は女子供を含む若い衆が見つかると、解放軍の新たな構成員として連れて行かれてしまうので隠しているようだ。
　兵士達は使える人材が居ないか探している。特に、年端の行かない子供は解放軍兵士として教育し易いので、成長した若者よりも重宝される傾向にあった。
『なるほどー、こうやって仲間を増やしてるのかー』
　人員補給で村や集落を訪れた場合は、家捜しまでして使えそうな者を連れて行くところだが、今回は物資の補給に立ち寄ったので、僅かばかりの水と食料の提供を受けると、特務別働隊は出発準備に取り掛かる。
　ホッとしている様子が窺える村人達の思考から、子供達を隠している場所を割り出していたコウは、隊長のローブからふよふよと飛び立った。
「？」
「どうしました？」
「いや、気のせいか」
　首を傾げつつかぶりを振った隊長は、何でもないと言って出発準備を整え始める。
　彼は一昨日辺りからやけに近い場所、自分のすぐ傍に誰かの気配を感じて不気味に思っていた。

急にその気配が遠ざかった気がして疑問を浮かべたものの、兵士稼業などやっていればよくある事だ、と流したのだった。

石と土を固めて造られた村の建物上空を浮遊するコウは、岩壁の角部分に立つ家の屋根に降り立つ。煙突らしき隙間から屋内に入り込み、更に床に敷かれた薄い絨毯の上を旋回。この下に自然の小さな洞穴があって、そこが隠し部屋になっているのだ。

『うーん、小虫くんの身体じゃ入れないなぁ』

暫く部屋の中を漂っていたコウは、壁際にクローゼットらしき家具を見つけたのでそちらへと飛ぶ。扉に張り付いて精神体の頭を突っ込んでみると、何点かの衣服が吊られていた。

『これをもらっていこう』

少年型の体格に合いそうな村服を拝借し、代わりに十分なお金を置いていく。

あちこち修繕された跡の残る少々傷んだ服だが、この方が自然だと満足げに異次元倉庫へと仕舞うと、コウは煙突から建物の外に出て、そのまま村の出口に向かって飛んだ。そうして村の外れまで移動したコウは、小虫から抜け出す。

『小虫くん、ここまでありがとね』

コウの語り掛けに何か答えるような雰囲気を残して、小虫はどこかへと飛び去った。

周囲に人影が無い事を確認し、複合体を出して憑依したコウは、とりあえず魔導輪でその場を離

れる。村人達から得た情報を基に、近くの果実採集場所へと向かった。

目的の場所に着くと、身体を少年型に乗り換えて作業開始。山間にできた僅かな平地に群生する植物から幾つか実を採り、以前ダンジョンで拾った古いかばんに詰めて擬装用の小物が完成した。次に少年型の外装を、いつもの街服から全裸に切り替える。

「そういえば、こうして服を着るのって初めてかも」

拝借してきた村服に袖を通し、村の子供に変装したコウは、ごろごろごろーっと地面を転がって適当に身体を汚し、偽装完了。特務別働隊が通る道に先回りしていかにも『村の外へ食料の実を採りに行って来た子供』を装いながら道を行く。

やがて、移動を始めた部隊と鉢合わせした。

「む？　小僧、そこの村の者か？」

「うん、そうだよー」

一言二言、言葉を交わしながらじろじろと値踏むようにコウを見定める隊長。

少し舌足らずに感じるが、こんな辺境の田舎村に住む子供など大体こんなモノだろう。泥で汚れた顔もよくよく観察してみれば、かなりの器量――

両親は既にいないという村の少年（コウ）に、隊長は『上玉』の判定を下した。

「お前、我々と一緒に来い。同志として迎えてやろう」

バッフェムト独立解放軍に来ればもっとマシな服を着られるし、飯も腹いっぱい食える。同年代

の友人もできるぞと、コウはほぼ強引に部隊の小間使いに編入される。
戸惑い（の演技）を見せながら彼等について行く事を了承したコウは、最後尾を行く兵士に引き上げられて砂馬に跨った。
『というわけで、ばっふぇむと解放軍に潜入するよー』
――独立解放軍な。とりあえず宮殿（こっち）も今はバタバタしてるけど、その内そっちの動きにも呼応できると思うから、無理せず頑張ってくれ――
京矢と意識の奥で交信したコウは『りょーかい』と返して、特務別働隊の隊列が進む山道に視線を向ける。徐々に険しさを増す周囲の山々。低く流れる千切れ雲が岩肌に影を落としては去っていく。
『良い人がいればいいなぁ』
渓谷から吹き上げる風に髪を撫でられながら、コウはバッフェムト独立解放軍の人達との出会いに期待するのだった。

2

渓谷を越え、廃鉱と繋がる入り組んだ洞窟を抜けると、そこだけ切り取られたかのように開けた

空間が広がる。
険しい岩山の連なる山脈の中にできた平地。この辺りの岩山には同じような場所が幾つか点在しており、ここはバッフェムト独立解放軍が隠れ家に使っている内の一つだ。
先日、マーハティーニの征伐軍の包囲からどうにか逃げおおせた解放軍本隊は、新たな本拠地を構えるに当たって損害の出た各部隊の編成を見直すなど、組織の立て直しを図っていた。
「別働隊が帰還したぞー！」
洞窟前の見張り役が叫ぶ。出入り口を塞ぐ格子状のバリケードが開かれ、帰還した特務別働隊を本隊の同志達が出迎える。
「おお、砂馬じゃないか！　調達してきたのか？」
「エッリアの施設からかっぱらって来たんだ、残念ながら任務は失敗してしまったが」
「そうか……いや、しかしお互い無事で何よりだ」
「本隊もかなり危なかったそうだな」
わらわらと集まって来た若者や年配の同志達が互いを労い、無事を称え合う。そんなちょっとした盛り上がりの中、後方から人垣が割れて、若い男性を従えた少女が特務別働隊の前に現れた。
ゆるくカールした金髪混じりの斑（まだら）な茶髪を後ろで纏め、橙色の瞳で真っ直ぐ別働隊の隊長を見上げる少女。年の頃は十六、七歳くらい。別働隊の隊長がさっと姿勢を正して敬礼すると、部隊の兵士達もそれに倣（なら）う。

「申し訳ありません、フロウ様。どうにか帰還は果たせましたが、任務は完遂出来ませんでした」
「いいえ、無事に戻ってくれて何よりです。危険な任務、ご苦労様でした」
少女は、頭を垂れて任務失敗を詫びる隊長を優しく労う。彼女こそバッフェムト独立解放軍の指導者として崇(あが)められる、かつて組織を立ち上げた『プック一族』の長の娘フロウ・プックであった。
『この人がリーダーなのかな？』
厩舎に運ばれて行く砂馬から降りたコウは、集まった人々から敬意を払われている少女を観察する。解放軍を統(す)べる指導者としては随分歳若く、スィルアッカのような支配者らしい毅然(きぜん)とした覇気も感じられない。ごく普通の少女に見える。
「あら？　その子は？」
特務別働隊の隊員達に交じって様子を窺っている少年を認めたフロウが訊ねる。隊長は少年(コウ)を、道中の村で拾った孤児だと説明した。身寄りも無く、寂れた村に独りで暮らしているようだったので同志に誘ったのだと。
「まあ、そうでしたか……あなた、お名前は？」
「ボクは、コウ」
偽名を使おうかとも思ったコウだったが、この地域の自然な名前が思い浮かばなかったので、そのまま名乗る。その名を聞いた特務別働隊の隊長は、一瞬『ん？』という表情と共に冒険者ゴーレムのイメージを思い浮かべるも、『関係ないか……』とすぐに忘れたのだった。

冒険者協会の影響が低いナッハトームでは『冒険者コウ』の名もさほど知れ渡っていない。
グランダールから遠く、ナッハトーム帝国内でも反乱軍という立場にあるここの人達が、エッリアの上層部の人間でさえ見抜けなかった冒険者ゴーレムのコウと少年コウの関係に気付ける由も無い。
「ようこそ、コウくん。私達はあなたを仲間として歓迎するわ」
「よろしくー」
大勢の知らない大人達に囲まれてきっと緊張しているだろうと思い、気分を解(ほぐ)してあげようと声を掛けたフロウは、妙にあっけらかんとしたコウの返答に少し驚き、思わず笑みをこぼした。
「うふふ。ではマズロ、コウくんに同志の服を用意してあげて？　所属は少年部になるのかしら」
「畏まりました、お嬢様」
フロウに付き従っている男性が丁寧に答える。彼は先代であるフロウの父に参謀役として仕えていた解放軍でも古参のメンバーだった。今は参謀総長としてフロウの補佐をしながら、組織のまとめ役を引き受けている。実質、独立解放軍を動かしているのはこの男であった。
「初めましてコウ君、私はマズロッドという」
「コウです」
灰色の髪に長身で面長、冷静沈着な光を携えた碧眼がコウに向けられる。子供の扱いも心得ている雰囲気で、優しく微笑みかけるマズロッド。だがコウは、彼に対してバッフェムト独立解放軍の

中では最も注意しなくてはいけない相手であるという判断を下した。
「じゃあ行こうかコウ君、少年部のテントに案内しよう」
「はーい」
バッフェムト独立解放軍の参謀総長マズロッド。彼の思考から読み取れた個人情報の中で、まず明らかになったのは、幼児趣味の性癖を持ち、特に小さな男の子を好んでいる事などだった。が、その辺りはコウにとっては些細な事情でしかない。
マズロッドの注意しなくてはならない部分、それは、彼がマーハティーニと通じている事であった。

コウが配属された『少年部』は、一般訓練生や攻撃隊候補生になるには年齢が若過ぎる子供が主に所属している。配膳や清掃、裁縫、武具磨き、組織内の支給品配達などの雑用を担う『予備隊』の部署だ。
予備隊の中でも少年部を卒業する年齢になれば『青年部』へと上がり、そこで組織の一般構成員として訓練生になるか、素質があれば攻撃隊の候補生として各種訓練を受ける事になる。
解放軍構成員少年部の制服に着替えたコウは早速、少年部に所属する他の子供達に紹介された。
「今日から我々の仲間になるコウ君だ。皆、仲良くするように」
参謀総長（マズロッド）の紹介に、子供達から素直な返答が上がる。満足げに頷いたマズロッドは後の事を少年

部の纏め役に託すと、コウの頭をひと撫でして自分の仕事場へと帰っていく。
着替え中、身体を彼方此方触れられても嫌がらないし怖がらない上に、異国人特有のエキゾチックな容姿で相当に器量の良いコウの事を、マズロッドはかなり気に入ったのだった。
ちなみに、意識の奥でリアルタイム交信中だった京矢からは『そいつ、バールのようなモノでぶん殴りてぇー』という感想が届いていた。
「コウくん、コウくん、あなたはどこから来たの？」
「その……コウくんの黒髪って、め、珍しいよね……ぼくも、ちょっと黒っぽいんだ」
「〝あまね〟たべるー？」
集まってきた少年部の子供達が口々に話し掛ける。見た目が珍しい事もあってか、みんな興味津々といった様子で瞳を輝かせている。そこへ、いかにもワンパク小僧な雰囲気を纏った男の子が他の子達を押しのけて来て、コウの前に立つ。
「おい新入りっ、オレがここのボスのバゼムだ、きょうからはお前もオレの子ぶ――っ」
スパーンと後頭部を叩かれて言葉を詰まらせるバゼム。見れば、コウに最初に話し掛けてきた活発そうな女の子が、平らな板切れを重ねて棒状にした物体を片手にふんぞり返って、バゼムを睨みつけている。
「――ってーなミア！　なにしやがるっ」
「なにしやがるじゃないでしょっ、来たばっかりの子にウソ吹き込むんじゃないわよ！」

「ねーねー、〝あまね〟たべるー？」
ミアと呼ばれた女の子とバゼルが言い合いを始める中、子供達の中では一番幼い印象の女の子が、食べられる木の根で作られる白っぽいお菓子を手に、マイペースでコウに話し掛ける。とりあえず、コウはこの一番小さな子の相手から始める事にした。
「今はいいよ、ありがとう」
「んー」
甘根をもぐもぐと噛みながらニコーと笑う女の子。名は〝ラッカ〟というらしい。
その後、なんだか地味で目立たないトウロという男の子と挨拶を交わし、黒髪が本物である事などを話す。そうしていると、自分達を差し置いて自己紹介が進んでいるのに気付いたミアとバゼムが、慌てて話に参加した。
「あたしミア、よろしくね！」
「オレはバゼムだっ、少年部でボスを――」
再び、スパーンと小気味良い音が響いた。

ひと通り顔合わせが終わると、コウに最初に任された仕事は武具磨きだった。
武具磨き、衣類の修繕といった内職的な仕事で解放軍の生活環境に慣れ、清掃業務や配膳係に就く期間で各部隊の関係者や部署を覚える。そうして組織内で同志の皆と顔馴染みになる頃には、支

給品の配達なども任せられるようになる。
　主力攻撃隊や一般兵士の使う支給品である武具は、金属を使った装甲部分が少なく、革鎧を少し補強した程度の軽装備になっている。これは別に、身軽さを強調する為ではない。解放軍の正式装備として武具の仕様を統一するにあたり、生産力の問題で殆どが戦利品など、手に入れた既存の武具を弄って外観を合わせるという方法で対処しているからだ。
　ぶっちゃけ、ガワだけ似せて中身はバラバラなので、当たり外れが激しいのであった。
　十歳前後の子供達に交じって、作業場に積み上げられた武具をキュッキュッと磨きながら、コウは解放軍内のシステムやら懐事情など確認出来る範囲で情報を集めて記憶していた。そこでふと、作業場の奥から自分の方を窺う小さな影に気付いた。
　武具の山から顔を覗かせてじぃ～っとコウを観察している女の子。顔合わせの時は見なかった子だ。
　コウが視線を向けると、ビクッと肩を震わせて武具の山に隠れてしまった。しかし、女の子から向けられる気配は、まだハッキリと感じられる。その『視線』というよりも『思念』といった方がしっくり来る感覚は、祈祷士（きとうし）リンドーラを思い起こさせた。
　試しにコウは、女の子の気配に向かって話し掛ける。
『……君、ボクのことが分かるの？』
　――っ！　……あなた、にんげんじゃない……――

　なんと思念による答えが返って来た。この子には祈祷士系の才能があるらしい。
『うん、この身体は召喚獣だけど、ボクはちゃんと人間だよ』
　――……ウルハには、こわい影がいっぱいみえる……――
〝ウルハ〟と名乗った少女は、コウの周囲に沢山のモンスターの影が見えて怖いと怯える。心の中に直接話し掛けられたのも初めてだったので、その事にも恐怖しているようだ。
　このウルハという少女、まだ能力が形をなしていないようだが、人の心をある程度見通す才があり、その人に関連する〝命の残（のこ）り香（が）〟を視覚的に感じ取れるらしい。
　そしてこの能力故に人を怖がり、いつもどこかに隠れてはこっそり観察するという、引っ込み思案な子になってしまった。
　――ネズミとかコウモリとか、おっきいトカゲとか、こわい顔の黒い犬とか――
　他にも巨大な蛇や、犬の頭に捩れた角を持つ白いモサモサの巨大な魔物といったモンスターが視えるらしい。それらは皆、今までコウが憑依した動物やモンスター達であった。
　――……マモノ達、呼び寄せられて……いっぱい来る――
『それはみんな身体を借りたり、一緒に旅したりした動物やモンスター達だね。凶暴なのもいるけど、ここには来ないから怖くないよ』
　ウルハはふるふると首を振る。そしてハッと顔を上げると、いつの間にか目の前まで迫っていたコウに驚いて逃げようとした。が、武具の山からはみ出していた篭手（こて）を踏んづけてしまい、足を滑

らせてペタリと尻餅をつく。
「は、はわわわう」
「こわくない、こわくない」
なでなでで――首を竦めてはわはわ言っているウルハの頭を優しく撫でつけ、少し癖っ毛の髪を軽く梳く。暫くすると、ウルハの表情が恍惚でポヤーとし始めた。
ちなみに、頭を撫でつける絶妙な手つきや、髪を梳く繊細な指使いなどはコウの意志によるモノではなく、例によって『身体の性能』が発揮された結果である。
警戒心を蕩けさせられてポーっと見上げるウルハに、コウは自分の正体を『内緒にしておいてね』とお願いする。
こくりと小さく頷くウルハ。『コウは怖くない』と知って落ち着きを取り戻した彼女は、以後、解放軍の中でも自分の能力で話が出来る唯一の相手として、コウに懐いていくのだった。

夕刻を過ぎる頃、仕事を終えた者は食堂テントに向かったり、身体の汚れを取る為に洗い場へ赴いたりと、思い思いの行動で一日の終わりを過ごす。
少年部も支給品配達や清掃業務、配膳係などの仕事以外は早めに切り上げるので、コウの所属する武具磨き組の子供達はこれから自由時間に入る。
「今日は湯浴みの日だから、男の子達は水汲みに行ってあげてねー」

青年部から纏め役として来ているお姉さんの呼び掛けに、『はーい』という複数の返事が上がる。この辺りで湯浴みと言えば、ほぼ密閉状態の室内で焼けた石に水を掛けて水蒸気を発生させるサウナが一般的であった。
解放軍キャンプでは何重にも布を重ねたテントが、サウナ小屋として使われる。基本的に子供から大人まで男女の区別は無く、一つのテントに大人なら四人、子供なら六人程が入って皆で汗を流す。
ミアがバゼムをしばくのに使っている平板の棒は、実はこのサウナで温まった身体を叩いて血行を良くする為の道具だ。
「わあー、コウくんって肌がきれーい」
同じテントで汗を流しているミアが、感心したようにコウの腕や背中を眺めている。
この年代の子供達ならば、健康である限り誰もがすべすべとした瑞々しい肌を持っているが、コウの身体は奉仕用に作られた召喚獣の中でも最高級のモノだけに、美しさも群を抜いていた。
「女みてぇだな、ぜんぜん肉ついてねぇ」
「あんただって貧相でしょうが」
「なにぃ、オレはちゃんと筋肉ついてるぞ！」
『見ろっ』と力コブを作るバゼムの少し日焼けした身体には、無数の小さな傷跡がある。少年部の仕事や遊びでできた、いずれも成長の途中で消えてしまうであろう傷跡だが、彼がいかに活発な少

年であるかを表していた。
「あ、ウルハ？　のぼせそうならいったん出なきゃだめよ？」
「ん……」
ぽけーっとして見えるウルハにミアが声を掛けると、ウルハは大丈夫と小さく答える。子供ながら姉さん女房的な貫禄を持ちつつあるミアは、小さい子供達の面倒をよく見ていた。巻いて捻った布で垢すりもして身体を洗った子供達は、スッキリしてサウナを後にする。
心地よい夜風を浴びながら並んで歩く少年部の子供達は、皆まだ幼く、組織と共に行動し、組織の為に働いてはいるが、解放軍の事を正しく理解していない者も多い。
「バゼムやミアは青年部にあがったらどうするの？」
「あたし？　あたしは一般の訓練生に入るかなー。衛生の仕事につきたいの」
「オレは攻撃隊候補生狙いだぜ！　〝炎と剣〟のマークを付けて活躍するのさっ」
解放軍の構成員としてスローガンを刷り込む本格的な教育が始まるのは青年部からで、少年部の彼等は普通の村や街にいる子供達と思想も大差ない。ただ組織の指導者を敬い、組織を支える為に働く事を良い事だと教えられている程度であった。
「コウくんはどうするの？」
「ボクは決めてない」
「即答かよ」

「あははっ、まだ来たばっかりだもんね」
コウの答えにバゼムが突っ込み、ミアがフォローを入れる。三人のすぐ後ろをウルハがちょこちょこと付いて歩く。就寝の刻までを過ごす中央広場の焚き火の前にて、和やかに語らっている青年部の若者達を横目に、コウ達が少年部のテントへ戻ろうとしたその時――
「調達部隊が帰還したぞーっ、皆を集めてくれー！」
洞窟前の見張り役より、バッフェムト独立解放軍の生命線でもある第四軍、〝水と船〟のマークを付けた『調達部隊』の帰還を知らせる声が、夜の帳（とばり）に包まれた解放軍キャンプに響き渡った。

3

食料や日用品を仕入れてくる調達部隊の帰還によって、俄かに騒がしくなる中央広場。ある意味、祖国の地を離れて流浪する集団であるバッフェムト独立解放軍にとって、なくてはならない存在、それが調達部隊だ。
だが彼等の存在こそが、近隣国から『解放軍は訓練されたごろつきの集団』と揶揄（やゆ）される原因でもあった。
広場には部隊が調達してきた軍資金と、換金せずそのまま使う日用品が並べられている。衣類や

少々使い込まれた食器類の他、嗜好品も幾つかあり、これらはいわゆる『戦利品』であった。品物の中には、僅かに血痕の付着している物も見受けられる。

暫くすると人垣が割れ、解放軍指導者フロウと彼女に付き従う参謀総長マズロッドが、調達部隊の帰還を出迎えに現れた。

「おお、これはフロウ様、マズロ殿」

「我ら第六調達部隊、ただいま帰還いたしましたっ」

「みなさん、いつもご苦労様です。ところで、今回は随分と品物が多いですね？」

やけに生活用品が目立つ、と入手経路を尋ねるフロウ。第六調達部隊の部隊長は、マーハティー二軍の輸送部隊を発見したので襲撃してこれを撃破、後は帰還途中に遭遇した盗賊団を征伐してその馬車と積荷を手に入れたのだと答えた。

凄い功績じゃないかと、広場に集まっている同志達が武勇伝に沸く。調達部隊の帰還に居合わせ、出迎えに参加していた少年部の子供達も同様で、バゼムが『水と船のマークでもいいかな……』などと呟いている。

そんな中、ここに集まっている人々の思考を読んでいたコウは、この調達部隊が実は一般の商隊を襲って荷物を奪っていた事を見抜いた。

隣村までの引越しで商隊に同行していた一家が、略奪行為の隠蔽目的で皆殺しにされていた。日用品が多いのは、彼等の家財道具を戦利品として取得したからだ。

足の付きそうな物は破棄し、組織内で再利用出来そうな物を戦利品に加えたらしい。

ちらりとフロウの思考を読んでみると、調達部隊の一部が略奪行為を働いている事に関して、彼女も薄々感づいてはいるようだ。が、何も知らない振りをしている。

自身はただ、組織を象徴する指導者たらんとし、部下達の行動は組織の為と目を瞑り、その働きを労う。良心の呵責と不安に押しつぶされそうな心を封印して指導者を演じている――コウはフロウの在り方をそんな風に感じた。

「ん？　こんなものまであるぞ」

「あ……ああ、そいつは盗賊団の積荷にあったものだな。多分、どこかの集落を襲撃した帰りだったんだろう」

戦利品の中には、手作りらしい布製のお人形が混じっていた。どうやら処分しそびれた物らしい。持ち主への所業を思い出した部隊長が若干の動揺を浮かべるが、それに気付く者はいない。その内心を見通しているコウ以外は。

少年部の小さな女の子にでもあげようかと人形を手に取った同志の一人が、誰か欲しい子は居るか？　と集まっている子供達を呼ぶ。いかにもお人形を抱いた姿が似合いそうなウルハは、人形の正面に立つ事を嫌がってコウの背中に隠れた。

〝命の残り香〟を知覚する彼女には、人形の持ち主であった女の子の姿が視えているのだ。

〝命の残り香〟はそれ自体が現象界に何らかの干渉を及ぼす事はないので、基本的に無害な幻影と

同じである。視えていても気にしなければ問題なく、視えていなければ尚更問題ない。
「あっちっ、あっちがほしぃー！」
「お、欲しいのか？　ならチビちゃんにやろう」
「わーい」
その人形は、ラッカに与えられる事になった。

夜も更けてきたという事で、少年部の子供は休むよう言い渡され、テントに帰って来たコウ達はベッドに入った。
ベッドといってもマットレスが敷かれた上等なモノではない。干草を包んだシーツを置いて横になり、その上から毛布を被るといった簡単な作りで、皆が一箇所に寄り添って眠るのだ。干草が無い場合は大量のボロ布などで代用している。
「あれ？　ウルハ、今日はコウくんと寝るの？」
「うん……」
コウの隣に自分の干草ベッドを置いて、もぞもぞと毛布に包まるウルハ。いつものようにベッド群の真ん中に転がるラッカは、貰ったお人形をしっかと握って既に寝息を立てている。
普段なら就寝前のひと暴れでバゼムチームとミアチームによる毛布を丸めての叩き合いなど始まるところだが、今日は調達部隊の帰還で遅くなっていた為、皆すぐ横になった。

寝静まった少年部の共同生活テント。広場の方からは時折、大人達の笑い声が響いてくる。酒盛りでもしているようだ。
睡眠をとる必要が無いコウは、夜から明け方にかけて寝床で諜報活動を続ける。今日の出来事を纏めて、エッリアの離宮にいる京矢と意識の奥で話し合う。元々日本でも夜型の生活をしていた京矢は、この世界でもほぼ夜型生活に入っているので、静かな夜間は交信をして過ごすのに最適だ。
京矢はコウから受けた情報をスィルアッカへ、スィルアッカからの指示をコウへと、実にスムーズに情報の橋渡しをおこなっていく。
――調達部隊なぁ……実質『略奪部隊』なわけか――
『うん、フロウはそういう事させたくないみたい。諜報部隊が略奪してる事をしらない構成員も多いみたいだね』
――で、例のペド参謀はその辺り全部知ってるのな――
『まだ本格的に探ってないからはっきりとは分からないけど、あの人を調べたら色々分かるかも』
マズロッドを本格的に調べるのなら、少し接触の機会を増やすだけで自然に接近出来るだろう。
なにしろコウは彼が目をつけているお気に入り少年リストの中でも、一番の注目株なのだ。
――それはちょっとな……絶対お前の身体求めてくるぞ、アレは――
『ボクは平気だよ？』
――俺がいやだ――

『あはは』
そんなやり取りをしていると、公務を終えたスィルアッカが離宮に顔を出した。京矢から相談を持ち掛けてみると、暫くは現状を維持しながら反乱軍指導者の支えになってやれというアドバイスが返ってきた。
「実権は参謀総長（マズロッド）が握っているとして、反乱軍構成員の支持を一身に受けているのがその指導者（フロウ）なら、権威は指導者にある」
もし指導者が自身の意見を強く主張出来るようになれば、組織の在り方にも反映される筈だ。ただし、実権を握っている参謀総長次第で、思い通りにならない傀儡には謀殺を計る危険性もある。
「マーハティーニと通じてるんだったな、そういえば」
「まだ策略家（レイバドリエード）の狸親父（モ）と直接関係しているのかまでは分からないがな、コウにはその辺りも調べて貰いたい」
参謀総長とマーハティーニの繋がりがどういう性質のモノなのか、フロウが目指す組織の最終目的や理念はどこにあるのか。まずは敵の事情をよく知る事だ。
『敵を知り、己を知れば百戦危うからず』ってとこか……」
「ほう？　良い言葉だな。キョウヤの国の軍訓か？」
「んにゃ、ずーっと昔にお隣の国で兵法書とか作った偉い人の名言、かな？」
スィルアッカの『反乱軍の手助けはほどほどにな』という忠告に、京矢は『略奪とかする必要が

減るような助け方ならいいかもな』と意見を付け加えてコウに伝えた。
『分かった。何か考えてみるよ』
――おー無理せず頑張れー。あと、くれぐれも簡単に身体許すなよー――
リアルタイムで擬似体験とかイヤ過ぎるぞ、と釘を刺す京矢なのであった。

翌日。まだ少年部の皆が寝静まっている内から起き出したコウは、水汲み用の桶を持って廃鉱と繋がる洞窟に向かった。
隠れ家の一つであるこの平地では、洞窟の中に湧き出している地下水を生活用水として使っている。薄暗い解放軍キャンプの中央広場を通り抜けて洞窟の入り口にやってくると、バリケードの格子を背に居眠りをしている見張り役の姿があった。
「おじさーん」
「んをっ！　なんだなんだっ」
「おはよー、水汲みにいくからあけてー」
「なんだ坊主、随分と早起きだな」
あくび交じりに首と肩をコキコキ鳴らし、見張り役のおじさん同志は格子状のバリケードを開く。明かりのランプを受け取ると、コウは洞窟の中へと入っていった。湧き水の場所まで入り組んだ洞窟内で迷わないよう、壁に目印が付けられている。

目印に沿って進んでいたコウは、入り口が見えない位置まで来たところで適当な横道に入って明かりを消すと、憑依出来そうな虫が居ないか探索する。地元の虫ならこの辺りの事に詳しいかもしれない。どこに餌場があるとか、どこに近付いてはいけないといった本能的な意識を感じ取るだけでも、付近の様子を把握する事が出来る。

解放軍構成員達の思考を読んだ限り、普段は緊急時に使われる隠れ家の一つでしかないこの平地周辺は、通り道となる廃鉱と洞窟も浅い所までしか探索が行われていないようだ。

奥まで探索すれば何か見つかるかもしれないし、何も見つからなくとも異次元倉庫から適当なお宝を見繕い、『迷子になってたら見つけた』と差し出せば、軍資金を少しばかり増やしてあげられる――というのがコウのアイデアだった。

魔力の篭もった石の欠片を目印代わりに置きながら、洞窟の奥へと進んで行く。目印の石は普通の人の目にはただの石ころにしか見えないが、魔力を視認出来るコウにはぼんやりと発光しているように見えるので、見失う事も無い。

しばらく探索していると、洞穴生物らしき小さな虫を見つけたので憑依。人や動物では通れない岩の隙間情報など拾いつつ、近くに餌場がある事を感じ取る。かなり大規模な餌場らしい。

『あっちの方向か……この虫君なら岩の隙間を這って行けるけど、人が通れなきゃ何か見つけても意味ないからなぁ』

場合によっては複合体で壁に穴を開けて道を作るという手もあるが、あまり派手な事をして崩落

でも起こしては大変だ。大まかな方向を覚えて少年型に戻ったコウは、再び洞窟の探索を始めた。

少し高めの段差を降り、大きな水溜まりができている開けた空間に出ると、微かに空気の流れが感じられた。その風に乗って漂う悪臭。これは近くにコウモリのような生物が居る事を示している。

風と悪臭を追って右側に見える穴へと足を進める。相当に曲がりくねった通路を進むにつれて徐々に湿気が増していき、周囲の温度も上がり始めた。そして反響するキィキィという特徴的な鳴き声。壁や床で蠢く虫の数も急激に増えていく。

『虫君の餌場はここかぁ』

床一面を埋め尽くすコウモリの糞と、それを覆って蠢く虫の大群。天井には、黒い小柄な体躯のコウモリが群れをなしてぶら下がっていた。足元の虫達がワーッと放射状に逃げ出して行く中、コウは緩やかなカーブの続く通路の先へと歩を進める。

やがてコウモリの糞地帯を抜けると、岩壁の先に青い水面と光の柱が現れる。

「あ、外だ」

ぐるりと弧を描いた通路の先には広々とした地底湖が広がり、ぽっかりと開いた天井から外の光が射し込んでいた。そこから大きな蔦のような植物らしきモノが大木の如く連なり、地底湖まで垂れ下がっている。よく見ると表面が白っぽいそれは、木の根っこのようだ。

中々に美しい幻想的な光景。青く澄んだ地底湖の水はやけにしょっぱく、塩分が高いように思われる。

「そろそろ戻ろうかな」
少年部の子供達も目を覚ましている頃だろう。あまり収穫は無かったが、昨日の今日で居なくなってしまっては皆に心配を掛けてしまう。コウは今日の探索を切り上げて、解放軍キャンプまで戻る事にした。
とりあえず、天井から降ってくる虫やら糞やらで汚れてしまった服を洗い、素っ裸で糞地帯を抜けると、少年型の召喚を解除。もう一度召喚し直して綺麗な身体に戻り、異次元倉庫から少年部の制服を取り出して着替える。服の乾燥には付与系の魔術を使って、水分を弾き飛ばした。
水汲み場までの順路を外れた辺りまで戻ると、コウの名を呼ぶ複数の声が聞こえた。ミアやバゼムの声も混じっている。どうやら手の空いている者で捜索隊が組織されたらしい。水汲み用の桶とランプを取り出したコウは、『ここだよー』と声を上げてみた。
「コウ君！」
「やっと戻ってこられたよー」
『虫を追いかけてたら迷子になった』というコウの答えに、脱力半分呆れ半分の反応を見せる捜索隊の面々。脱走ではなかったと分かって一同ホッとしている。
洞窟のずっと奥にコウモリが居た事を話すと、捜索隊に加わっていた大人組の一人が興味を示した。部隊の出撃や帰還ルートの幅が増え、本隊を安全に移動させる際にも利用出来るので、新しい

出入り口が見つかったのならば調べておきたいのだ。
「それに、コウモリの糞が石になったやつは農作物の肥料として高く売れるからな」
「へー、そうなんだー？」
今日の探索の収穫はイマイチかとコウは思っていたが、意外と有意義だったのかもしれない。大体の方向や途中の段差など道の特徴を伝えると、急遽組まれた探索隊が奥へと赴く。
コウは自分の仕事である武具磨きをしに、少年部の作業場へと向かった。

「なあなあ、洞窟の奥って魔物とか出なかったのか？」
「魔物はいなかったなぁ」
清掃の仕事をサボって武具磨きの作業場に顔を出したバゼムが、興味津々に訊ねてくる。
冒険者に憧れているような雰囲気が感じられるバゼムだが、彼自身は冒険者という存在について詳しい知識を持っていない。物心付く頃から組織と共に行動し、組織の中で育って来たバゼムは、外の世界の事を殆ど知らないのだ。
「こーらっ、なにサボってるのよ！」
「げっ、うるさいのが来た」
平棒を振りかざすミアを捕捉したバゼムは、そそくさと作業場を後にした。騒がしく走り去る二人を見送ったコウの傍にウルハがやって来て、隣で武具磨きを始める。そうしてやおら念話を使っ

て話し掛けて来た。
――……お仕事、してたの……？――
『うーん、半分はそうかな』
コウがエッリアから来た諜報員であると認識しているウルハは、朝方コウが姿を消したのはそちらの仕事関係だと思ったようだ。
――もし……脱走するなら、一緒につれていってほしい――
『ウルハは、ここに居たくないの？』
ふるふると首を振るウルハ。ここの皆の事は嫌いではないのだが、コウと居る時の方が安心出来るという。それは取り繕いや見得といった虚勢で心を誤魔化さないコウならではの安定感と信頼感である。他者の心に触れられる祈祷士の才を持つウルハにとって、表と裏の温度差が少ないコウは、一緒にいてとても安らぐのだ。
『そっかー。ボクもずっとここに居られる訳じゃないから、エッリアに帰るときはキョウヤにも相談してみるよ』
――エッリア……キョウヤという人……兄弟……？　お兄さん？――
『キョウヤはもう一人のボクだよ』
――？　？　？――
一応は同一の存在でもあるコウと京矢の関係について、コウの心に触れられるウルハにもよく理

解出来なかったらしい。コウと並んで篦手を磨きながら、小首を傾げるウルハなのであった。
昼前頃には探索隊が戻り、採取して来たコウモリの糞石（ふんせき）や、地底湖に垂れ下がっていた巨大根の表面から取れた塩の結晶などが広場に並べられた。
組織の活動資金として大いに使えると、解放軍指導者のフロウや参謀総長マズロッドも交えて話し合っている。
「やあ、コウ君。お手柄だったね、君のおかげで素晴らしい資源が見つかったよ」
ウルハと食堂テントまで移動中だったコウは、広場を通り掛かったところでマズロッドに声を掛けられた。ウルハはマズロッドに『捕食者』の気配を感じるらしく、苦手としていた。コウの服の裾を掴んで、その背中に隠れてしまう。
そんなウルハの様子を気にした様子もなく、マズロッドはコウモリの糞石と塩の結晶でかなりの活動資金が得られると語った。
「マズロ、子供達にそんな話をしても、きっと難しくてよく分からないと思うわ」
「おおっと、これは失礼。少々舞い上がってしまいましたよ」
フロウに窘（たしな）められて頭を掻く参謀総長の姿に、周囲から和やかな笑いが零れる。この時、コウは『活動資金』というキーワードから、マズロッドの思考より重要な情報を読み取っていた。
――最近は新しい事業とやらで資金の減少が著しかったからな、これで何とか凌（しの）げるだろう――

マーハティーニから供給されていた組織の活動資金がここ最近減少気味だったせいで、調達部隊の稼ぎ程度では活動体制を維持出来ないと悩んでいたのだ。マーハティーニのどの辺りから資金が出ているのかまでは把握していないようだが、恐らくはレイバドリエード王による指示と推測しているようだ。その目的についても、マズロッドはおよそ見当をつけている。

『ディードルバード王子の名声を上げる為の策かぁ』

バッフェムト独立解放軍がディード王子の功名稼ぎに利用されている事に関しては、スィルアッカをはじめ各国の王達も暗黙のうちに理解していた。だが、まさか活動資金の提供まで行っていたとは誰も思っていなかった。

指導者であるフロウは、参謀総長（マズロッド）がマーハティーニと通じている事も、調達部隊の実態も、特務別働隊隊長の正体がマーハティーニに雇われたヴェームルッダの上級戦士長である事も知らない。

――完全な傀儡だなそりゃ――

『あ、おはよーキョウヤ』

――おはよう。とりあえずその情報、スィルアッカに伝えてくるよ――

『うん、よろしくー――あっ、それとねー』

解放軍の重要な裏事情を探り出したコウは、特に何を思うでもなく、いつもと変わりない調子で自身が帰還する時の事を相談し始める。マーハティーニの策略によって演出されていた、数年に及ぶ反乱軍と征伐軍のイタチごっこは、コウの暗躍により大きな変化を迎えようとしていた。

立ち読みサンプル
はここまで

4

元々は漁師達が集まって結成された、小規模な抗議集団でしかなかったバッフェムト独立解放軍。それを影で操り、糸を引いていたのは、最も征伐に熱心だったマーハティーニのレイバドリエード王であった。

レイバドリエード王が反乱軍に求めた役割は、反皇帝を唱える集団組織の表立った活動によって、現皇帝ガスクラッテや帝都エッリアの牽引力を弱め、反乱軍を鎮圧するディード王子の支持を高める事である。

つまりエッリアを宗主国の座から追い落とす為の道具として、圧政に苦しむ弱小国や地方部族から人材を集め、現在のような中堅国の一軍にも匹敵する武装組織を結成させたのだ。

長きにわたり隠蔽されてきたこれらの事実は、イレギュラーな存在によって明るみにされつつあった。

宮殿の資料室にて、スィルアッカはバッフェムト独立解放軍に関連する反乱軍資料を読み漁っていた。そしてコウからの決定的な情報を基に現状のおよその構造を推測、把握するに至った。